教うるは 学ぶの 半ばなり

教学半也

R５南信教育事務所だより

令和５年11月16日
No.7

授業から学ぶシリーズ ～特別活動①～

健康教育にかかわる先生方

「自分らしさ」を認め よりよく生きていくヒントを学ぶ健康教育
～飯田市立緑ヶ丘中学校 2学年の授業実践に学ぶ～

⓪生徒の実態・願う生徒の姿

廣瀬先生

生徒の中には、様々なストレスを感じ、依存的・利己的な方法で解消しようとする生徒もいる。生徒が、ストレスの本質を理解し、様々な解消法に触れた上で、最終的に**自分なりのストレスの向き合い方**を考え、これからの人生をよりよく生きていくためのヒントを得てほしい

ポイント1 特別活動で学ぶ健康教育

授業者の廣瀬　直弘 先生は、生徒がストレスに関する自己の課題に気付き、多様な意見をもとに、自ら解決方法や向き合い方を**意思決定**できることを願い、特別活動で健康教育の授業を構想しました。

特別活動　学級活動(2)エ「心身とも健康で安全な生活態度や習慣の形成」
題材名「心の健康ーストレスのない生活を送りたい！ー」
決してなくならないストレスだからこそ、「流儀（ストレスへの向き合い方）」を考えよう

①つかむ

第1時：「心の健康グラフ」で、自分の健康状態を把握する

②さぐる

第2時：イラストやボールで、ストレッサーやストレスの仕組みを理解する
第3時：班での話合いで、ストレス解消法を出し合う

③みつける

第4時：【各自、ストレスへの向き合い方を書き出す】

・ストレスについて深く考えたくない
・ストレスと戦うよりも逃げたい
（ストレスを自分はプラスにあまりできない）
・逃げることも大切にしたい

K生

【自分の考えと友の考えを比べ合う】
K生：『守りに強化する』
理由は戦うのは、自分には向いていない。へこむ…。
S生：私は『自分のストレスは自分で解決する!』
K生：Sさんは自己完結型だね。（自分のフリップを見つめる）

【クラス全体で様々な考えに触れる】

ストレスは共存するもの ストレスは思い詰めずに放置する	ストレスは消すものではない 自分のために使うもの

④決める

私のストレスとの向き合い方は、『守りに強化する』
未来は、いろいろなことがあったり、ストレスもあると思うけど、それを含めて健康でありたい。

ポイント2 現状や原因をつかむ視覚支援

ストレスは目に見えないものであるため、ストレスの仕組みを**グラフや具体物**を使い、視覚的に理解できるようにしました。それにより、自分自身を客観的に理解し、ストレスのイメージをもちやすくなった生徒は、自分にあったストレス解消法を考えられるようになりました。

ポイント3 様々な考えに触れられる形態

ペアやグループ、全体での共有の場面では、生徒一人一人が自分の考えを伝えられる様々な形態を設定。多くの考えに触れる中で、自分と向き合い、自分としての「意思決定」につながりました。

K生は、「自分は戦うことは苦手」と自分自身を客観的に評価し、そんな自分も含めてストレスと向き合ったとき、「自分らしさ」を認めながら、自分なりのストレスとの向き合い方を決めだしていきました。廣瀬先生が大切にした3つのポイントにより、「自分らしさ」を大切にし、ストレスについて級友と共に考える授業となりました。

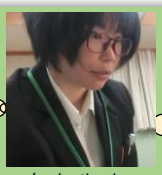
健康教育の資質・能力を、どの教科等の学習で育成するか、カリキュラム・マネジメントを行うことがポイントです。保健体育の学習や養護教諭との連携も活かし、児童生徒が自分の健康と向き合う授業に挑戦してみませんか。

授業から学ぶシリーズ　～特別活動②～

学級会の充実を図りたい先生方

子供たちが目的に向けて合意形成を図る学級会
～阿南町立大下条小学校　2学年の実践から～

人間関係が固定化し、思うように自分の意見を言えない子もいる



白鳥先生

相手の立場に立ったり、お互いの意見をつないだりして、話合いができたらいいな

2学年担任の白鳥　里菜子　先生は、子供たちの実態から、2年生であっても、一人一人が自分の意見をもち、友の意見を受けながら話し合う子供の姿を願い、特別活動　学級活動（1）の授業構想を行いました。子供の実態とこれまでの話合いの様子から、以下の3つのポイントを意識し、授業改善を図りました。

授業改善ポイント

ポイント1　自分の意見をもてる議題設定

▶相手の立場に立って話し合う経験ができるよう、**異年齢（保育園児）との交流会でやる内容を決める**ことを議題に設定する。

ポイント2　意見を整理する思考ツール

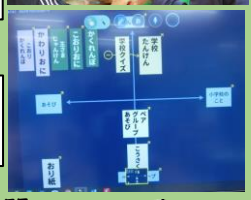
▶出された意見をまとめていく段階で時間がかかる様子が見られたため、「**座標軸（思考ツール）**」を活用し、意見を視覚的に整理する。

ポイント3　発達段階を考慮した教師の支援

▶中学年以降の学びを見通し、話合いの方法や合意形成の仕方を学べるよう、**教師がロールモデル**として、司会と書記の役割を担う。

議題名　だい3回こうりゅうかいでやることを考えよう
話合いのめあて　年長さんに小学校のことを知ってもらえる楽しいこうりゅう会にしよう

本時　話し合いの場面で合意形成を図ろうとする姿



◆近くの友達と話し合う「ご近所タイム」で自分の意見を伝え合う中で…

K児：学校探検は、**年長さんが**いろいろな部屋を**見たいと言っていたから**。
Y児：**同じだね**。僕も学校探検。**年長さんが学校のことを知れるから**。

◆出された意見が座標軸のどこにあるものかを確認しながら…

H児：（学校探検は）**学校のこと、分かってもらえるから**、これは絶対にやったほうがいい。
1番めあてに合っているから。

◆「かくれんぼ と こおりおに を合体して こおりかくれんぼにした方がいい」という意見を聞いて…

K児：かくれんぼと こおりおに **最初、（両方）やった方がいいと思っていたけど、Hさんの意見を聞いてこおりかくれんぼでいいと思った**。かくれんぼ と こおりおに が混ざっているから。

話合いのめあてに沿って意見を述べる児童や友達の意見を受け止め自分の考えを修正する児童のように、よりよい交流会を行うために、合意形成を図り、話し合う姿がたくさん見られました。白鳥先生は「年長さんのことを考え、目的に沿って自分の意見を言えるようになってきた」と子供たちの変化を語りました。

集団や社会の形成者としての思考力、判断力、表現力等の育成に向けて、指導・支援を工夫して、低学年から、発達段階に配慮した指導・支援を工夫して、子供たちの話し合う経験を重ねていきましょう。

授業から学ぶシリーズ　～理科～

理科に携わる
先生方対象

友と関わり合いながら、考えを深めていく学習へ

～協力して課題を解決する活動を通して～

伊那市立東部中学校の北條弘幸先生は、「予想や考察を、根拠立てて、自分の言葉で説明できる生徒になってほしい」という願いをもち、友と関わり合いながら、考えを深めていく学習を目指しました。ここでは、「水溶液の性質」における実践を紹介します。

目指す学習を達成するために

北條先生の授業には、以下のような工夫がありました。

★発展的な課題「謎の水溶液Ｘ」（７種類の無色透明な水溶液）の設定
生徒が予想や見通しを立てやすく、また、協力して解決しようとする意欲が自然と高まるよう、既習事項を生かして、試行錯誤しながら、多数の水溶液の正体を解き明かしていきます。

★観点を明確にした実験計画
過去の実験の失敗から学んだ「安全性」や「効率性」等の観点から計画を立てます。計画の妥当性について、根拠立てて説明する必然性が生まれます。

★ワールドカフェ形式を軸とした多面的な見方につながる話合い
班での検討で生じた課題について、ワールドカフェ形式での情報交換で得た様々な考えを踏まえ、さらに班で話し合うことで、考えを深めていきます。

自分の言葉で語る生徒　～本時から～

「水溶液の溶質を特定するためにはどうしたらいいのだろうか？」と問いをもち、生徒たちは計画を立て始めました。Ａ生やＢ生の班は、砂糖の見分け方で行き詰まりました。ここで、ワールドカフェ形式で他班との情報交換になりました。Ａ生は課題点をＢ生と確認して、勢いよく他の班へ行きました。

Ａ生：「うちの班は砂糖をどうするかが分かんなかった。
どんな感じ？（計画をＥ生に見せてもらって）
なるほど。えっと、砂糖ってすぐこげるっけ？」
Ｅ生：「（過去の実験の記録をＡ生と調べて、頷く）うちの班はにおいがあるかどうかでも実験するよ。」
Ａ生：「あー、なるほど。」（その後、他の班にも行く）

二人は班に戻って、さらに話合いを続けました。

Ｂ生：「熱するという班や、エタノールを見分けるために蒸発させてみるって班もあった。」
Ａ生：「あー、たしかに。砂糖も熱してこげるかどうか見る班もあったよ。」

砂糖についての情報を得たＡ生たちは、実験をどう進めるか、計画を考えました。

Ｂ生：「熱する班とにおいを調べるって班が多かった。」
Ａ生：「（少し考えて）分かるけど…、においはやっぱり五感だから（客観的ではない）。」（C、D生とも確認し、熱することから始まる手順を書き加える）

「分かるけど…」「やっぱり」といったＡ生の言葉から、友の考えを受け止め、自身の考えと照らし合わせながら、より妥当な実験計画について、考えを深めていったことが伺えます。

自分の言葉で考えを説明し合い、意欲的に課題の解決に向かっていく生徒の姿が印象的でした。北條先生は、ワールドカフェ形式での話合いを、入学当初からずっと続けてきているそうです。今回の授業での一つ一つの手立てはもちろん、自らの願いを大切にした実践を継続していく姿からも、多くのことを私たちは学んでいくことができます。

道徳科に携わる先生方対象

授業から学ぶシリーズ　～道徳科～

話合いを活性化させるための工夫

～友と話し合いながら自己を見つめ、多面的・多角的に考えを深められるようにするための授業づくり～

下諏訪町立下諏訪中学校の北原亨先生は、道徳科の中心的な学習活動である話合い活動を活性化させたいと考えました。道徳科の特質をふまえながら、生徒たちが関わり合い、自己の生き方についての考えを深められるような授業に挑戦しました。

主題名	本当の友情とは　B(８)友情・信頼　中学校２学年
教材名	泣いた赤おに（出典　光村図書）
ねらい	友情の尊さを理解し、自ら友情を大切にし、より豊かな人間関係を築こうとする心情を育てる。

〔泣いた赤おに〕人間と仲よくしたいという赤おにの願いを叶えるため、青おには悪者になります。不信感を抱かれないように、青おには赤おにのもとから離れていきます。

迷う気持ちを表せるように、「心情スケール」を使おう！〔工夫①〕
自分でじっくりと考えられるように最初は学習カードを使おう。〔工夫②〕

北原先生

きっと友達の考えも知りたくなるはず。共有すれば、話合いが活発になるのではないかな。ICTを使えば、簡単に共有できそうだな。〔工夫③〕

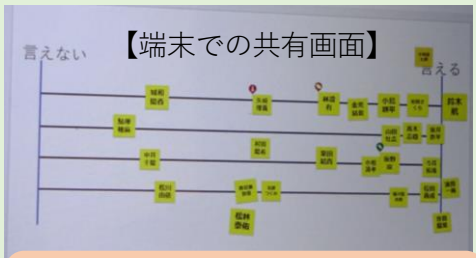
生徒の話合いの様子

中心発問：青おにには赤おににとって本当の友達と言えるだろうか

【A生の学習カードの心情スケール】

A生：言えると思う。友達でなかったら、青おにのために、自分が悪者になるなんてしない。赤おにのことを思っていたからこそ、赤おにから離れて行ったんだよ。

B生：すごく優しいけど、友達の元を離れてまですることなのかな。
C生：私は中間あたり。青おには赤おにのことを思って決断したのだろうけど、それが赤おにの望みかは分からないよ。
D生：確かに。でも、赤おにだって、村人と仲よくなるために青おにを利用したんだよ。
C生：言えない派の人もいるんだね。その人の気持ちを聞いたら考えが変わるかな。



【端末での共有画面】

端末上でマークが重なり合わないように、4本の線を示しました。

北原先生の振り返り

「心情スケール」を初めて使いました。生徒たちは迷いながら位置を決めていたので、「言える」「言えない」の2択ではないのだなと改めて思いました。なぜその位置なのか理由を語り合いながら、自分のマークを動かす生徒もいました。今後は、フリートークも取り入れて、さらに深めていきたいです。

北原先生

道徳科は、心の中にあることを話し合います。見えない心を可視化することで、自分を見つめることにつながり、自覚が深まります。また、自他の立ち位置を比較することは、他者の考えに対する関心を高め、主体的な話合いにつながっていきます。

道徳科の中心的な学習活動である話合い活動を活性化させ、生徒の「友達観」を深めることにつなげるために、道徳科の目標に掲げられている「自己を見つめる」「多面的・多角的に考える」ことをふまえて学習活動を工夫した北原先生の実践に学びたいと思います。

外国人児童生徒等に関わる皆さん

地域を越えてつながり、実践をひろげる
～ 10/19 外国人児童生徒等指導研修会 ～

外国人児童生徒等の指導や支援に関わる方々が、参加方法（参集とオンライン）や、研修内容を選んで学び合う研修会を開催しました。29名に参加いただいた研修会の一部をお伝えします。

1. 実践発表 「日本語ゼロからの指導事例と教材紹介」

西村先生の安心できる語り

今回は、飯田市立松尾小学校の西村明美先生に実践発表をしていただきました。西村先生は、不登校児童への支援の経験を生かし、非認知能力（社会性や自己肯定感等）の育ちを大切にしています。子どもの興味のあることを指導に取り入れるようにし、アナログゲームを通して、日本語でコミュニケーションする経験ができるようにしたり、読書が好きな子どもには、国語の内容を英訳するプロセスを共有し、読むことの楽しさを大切に指導してきました。

また、「やさしい日本語のニュース」やリライト教材などを活用し、身近な言葉を楽しみながら学習すること、在籍学級や学校行事でも活躍できる場面を設定することなど、具体的な子どもの姿や校内連携について教えていただきました。ICT機器も積極的に取り入れており、翻訳アプリ（VoiceTra）やタブレットで個別に学べるWebページ等を紹介していただきました。

「坊主めくりなど、アナログゲームの実践事例やリライト教材の紹介が参考になりました。」

「ルビ振り、分かち書きなど、『ごんぎつね』を例にした具体的な実践紹介があり、支援法を考えるきっかけになりました。」

2. テーマ別情報交換会

情報交換会では、3グループに分かれ、活発な意見交換がなされました。参集とオンラインの垣根なく、様々な立場で子どもの支援に携わる方が集うことの大切さを感じる時間となりました。

	支援の具体と教材紹介	保護者理解と地域連携	小中連携と進路支援
グループの様子	アナログゲームを実際に行い、子どもの立場でその良さを共有しました。持ち寄った資料を基に、互いの実践を共有した際には、実際の子どもの学びの姿から活発な意見交換がされました。	地域ごとに取組の様子や課題が異なり、解決の糸口を見出すことが難しい中、経験のある方が具体的な事例を挙げながら連携の在り方を語っていました。個別の事例では、保護者の立場に立った意見交換がなされました。	進路指導経験のある方からの事例紹介や、高校の先生からの情報提供がありました。ハイブリッド開催の利点を活かし、画面越しに参加者が必要としている資料の提供や情報の共有がされました。
参考となる情報	・同じ『ことば辞典』でも、実態に応じて、単語を読んで元の言葉を当てるなどの工夫で、異なる教材になる。 ・特別支援学級でも手作り教材を活用している。それを校内で共有したり、クラウド上で共有できるような連携の仕組を作れないか。	・外国籍のＰＴＡのある小学校があり、参観日などで行事説明を行っている。 ・保護者、本人の文化的な背景も校内で共有したうえで、指導することが大切。 ・答えは一つではないので、様々な事例に触れることが、指導の参考になる。	・国際化協会より、各学校に宛てて高校進学の説明資料を７か国語でお届けしている。 ・進路実現のために、希望する高校の教頭先生と早めに連絡を取り合う。 ・高校入試での配慮申請の手順については、県教育委員会のリーフレットが参考になる。

研修会の中で多く聞かれたのは『連携』という言葉です。外国人児童生徒等の支援には、学校全体でのマネージメントが欠かせません。管理職の先生や人的環境が十分でなくお困りの先生にも会に参加いただき、『連携』について情報を共有していきたいと考えています。次回もぜひ、ご参加ください。

長野県教育委員会

『高校入試における合理的配慮の申請フロー』

「欠員対策のための教員配置事業」

南信ブロック　サポート教員のようす

「お別れの時には、子供たちが泣いて見送ってくれました。」

◆長野県教育委員会では、「欠員対策のための教員配置事業」を立ち上げ、南信ブロックに髙嶋義人先生（暫定再任用１年目）を「学校サポート教員」として採用し、欠員により学校運営が厳しい学校を中心に配置してきました。令和5年度前期の取組について、髙嶋先生へのインタビューをもとにまとめましたのでお知らせします。

◆事業の目的　・年度途中に急な休職等による欠員の発生に対して、代替者が確保されるまでのサポートに入る教員を配置することで、子どもたちの切れ目ない教育の実現及び教員の負担軽減を図る。（１回につき2カ月を上限）
・学校サポート教員が欠員対策をサポートすることで、欠員状況の改善を目指す。

◆南信ブロックにおけるこれまでの配置校：4/21～宮田小、6/1～長地小、7/22～伊那東小（本務校）、9/1～辰野西小、11/1～松尾小

Ｑ１：ご苦労も多いと思われますが、日々どんなことを考えて勤務されていますか。

Ａ１：これまで勤務したことのない学校にご縁をいただき感謝しています。少しでも学校のお役に立てるように、また、子供たちの困り感が少しでも解消されるようにと思っています。実際に勤務してみると、子供や保護者は「先生がいない」という不安感があるということ、先生方が補充のために大変苦労されていること、校長先生が必死で代替者を探されていることを目の当たりにし、少しでも子供たちが安心して学校生活を送ることができるようにという思いが強くなりました。

Ｑ２：何か心に残っているエピソードがあれば紹介を。

Ａ２：ある小学校では、不登校だったＡさんに寄り添っているうちに登校できるようになり、午後まで校内で過ごすことができるようになりました。また、ある小学校では、担当しているＢさんのお母さんから「子供が、学校が楽しいと言って帰ってきます。家でも自分の意思表示ができるようになったし、以前よりずいぶんと落ち着いています。先生のおかげです。ありがとうございます。もっといていただけませんか？」と嬉しい言葉をいただきました。これらの２校では、勤務最終日のお別れの時には、子供たちが泣いて見送ってくれました。また、先生方からいただいたメッセージカードにも「ピンチの時に助けていただきありがとうございました」というコメントが多く書かれていました。

Ｑ３：実際に勤務してみて、肌で感じることはどんなことですか。

Ａ３：思っていたよりも個々の子供の思いや生活背景が多様化していると感じました。その分、その子に合った対応を瞬時に行ったり、意味のある活動を仕組んだりするのが難しいです。これを日々行っている先生方のご苦労を実感しています。先生方からは、私の赴任によって、従来の職務に専念できたり、子供たちと過ごす時間が長くなったりして、本当に助かったと言っていただいています。代替者が見つからないという学校の窮状を実感しましたし、その期間が長ければ長いほど学校全体が疲弊すると感じています。いろいろなことに手が回らなくなって学校へのクレームが増えたり、子供が不安定になったり、ひいては療休者が出てしまうといった負のスパイラルに陥るのが心配です。また、教頭先生の負担が大きいのも心配していますが、教頭先生からは、学校サポート教員による学校支援で、代替者が見つからないことに伴う教頭の業務が軽減されていると、大変感謝されました。

Ｑ４：この事業に対してご要望等あればお願いします。

Ａ４：このお話をいただいたときにはびっくりしました。自分に務まるのか、学校のお役に立てるのか不安でした。でも、実際に学校に入ってみると、どの学校も温かく迎えてくださり、先生方と共に子供の指導支援に当たることができました。また、任期切れとなってその学校を去るときには、何とも後ろ髪を引かれる思いでした。代替者が見つからずに困っている学校は、南信地区に何校もあると思いますし、実際に赴任したくても複数校からの要望があり行くことができない学校もあります。もっと私のような学校サポート教員を配置していただけることを切に願います。

◆南信地区に１名のみの配置ではありますが、髙嶋先生には粉骨砕身取り組んでいただいております。事務所では、今後も各地区校長会と情報を密に共有して対応してまいります。また、代替者確保につきましても引き続き全力をあげてまいります。ご理解・ご支援の程よろしくお願いします。